

# 四季成り性イチゴ‘サマーティアラ’の春定植夏秋どり栽培における 最終花房摘除時期

丸子武志・高橋玲子\*・伊藤政憲\*\*

(山形県農業総合研究センター園芸試験場・\*山形県村山総合支庁農業技術普及課・

\*\*山形県庄内総合支庁産地研究室)

Effect of the Time For Removing Flower Cluster on Yield and Quality of Planted  
in Spring Everbearing Strawberry ‘Summer Tiara’

Takeshi MARUKO, Reiko TAKAHASHI\* and Masanori ITO\*\*

(Horticultural Experiment Station of Yamagata Integrated Agricultural Research Center・

\*Yamagata Murayama Agricultural Technique Popularization Division・\*\*Yamagata Shonai

Agricultural Technique Improvement Reserch Office)

## 1 はじめに

山形県では各種施策を展開し、夏秋イチゴの産地拡大を推進している。試験研究では県内4つの試験研究機関が役割分担をしながら、2008年に育成した四季成り性イチゴ‘サマーティアラ’と2009年に独立行政法人農業・生物系特定産業研究機構と共同で特許を取得した「二槽ハンモック気化冷却ベンチ」を核とした栽培技術の確立並びにマニュアル策定に向けた試験を実施してきた。

ここでは、山形県村山平坦地域における春定植夏秋どり栽培で、収量、品質が高く長期どりに適した花房の最終摘除時期と出蕾開始時の生育指標について検討したので報告する。

## 2 試験方法

### (1) 試験場所

園芸試験場内パイプハウス(山形県寒河江市)

### (2) 供試品種 ‘サマーティアラ’

### (3) 試験区および処理の概要

発生した花房を適宜除去し、最終花房摘除時期を4月20日、5月10日、5月30日とした。花房摘除処理は、開花の有無に関わらず摘除可能な花房を全て除去した。倍地表面から最上位の小葉先端までを草高、最大葉中央の小葉縦、横方向の最大長を葉長とした。

### (4) 試験規模 1区20株 反復なし

### (5) 栽培概要

#### 1) 育苗

2010年10月下旬にランナーから採取した子株を25穴連結ポットに挿し苗し、2011年1月5日に9cmポリポットに鉢上げして無加温ハウスで育苗した。

#### 2) 定植 2011年4月11日

### 3) 栽培システム

一液型給液装置を付帯した二槽ハンモック気化冷却ベンチ

### 4) 栽植密度

ベンチ間155cm 株間25cm 2条植え

(516株/10a)

### 5) 給液管理

〇社 養液土耕6号1000~3000倍液を施用

### 6) 遮光

ハウス内気温が30℃を超える場合に天井カーテンとして遮光率65%の資材を展張し、同時に通路散水を行った。

### 6) 収穫打切り 2011年11月18日

## 3 試験結果および考察

### (1) 生育

最終花房摘除時の平均草高は、4/20区が6cm、5/10区が20cm、5/30区が26cm程度であった(表1)。

最終花房摘除後に出蕾した株の割合が50%となった時の草高は、4/20区が20cm、5/10区が24cm、5/30区が28cm程度であった(表2)。

### (2) 収量

株当たりの可販果収量は、最終花房摘除時期が早い区ほど高く、4/20区が420g、5/10区が406g、5/30区が330g程度であった(表3)。

株当たり階級別秀品収量は、最終花房摘除時期が早い区ほど24玉以上(13g以上)の大玉収量が高かった(表4)。

### (3) 時期別可販果収量

4/20区は6月上旬から収穫が始まり、6月中旬と

7月下旬、秋季は10月中旬がピークとなった。5/10区は6月中旬から収穫が始まり、最初のピークが6月下旬で、その後は4/20区と同様の傾向を示した。5/30区は7月上旬から収穫が始まり、7月中下旬に最初の大きなピークとなり、8月の収量が他の区に比べて特に低く、秋季の収量も低かった(図1)。

#### 4 ま と め

山形県村山地域の平坦部における四季成り性イチゴ‘サマーティアラ’の春定植夏秋どり栽培で、最終花房摘除を4月中旬に行うと6月上旬から、5月中旬に

行うと6月中旬から、5月下旬に行うと7月上旬から収穫を開始される。夏季の収量が安定し長期どりに適した最終花房摘除時期は4月中旬で、この時の草高は6cm程度、株当たりの可販果収量は約420g程度であった。

また、4/20区の結果が示すように、‘サマーティアラ’は定植の10日程度後に最終花房摘除時期を設定しても一定程度の収量を連続して確保することが可能であったことから、市販品種のように数十日の株養成期間を設ける必要がないことが明らかになった。

表1 最終花房摘除時の生育

試験区	草高 (cm)	芽数	最大葉(cm)			株当たり 摘除花房数 (本)
			小葉長		葉柄長	
			縦	横		
4/20	6.3	1.0	6.6	5.8	5.2	0.6
5/10	20.5	1.2	12.0	9.5	10.0	1.1
5/30	26.2	2.2	12.1	9.8	12.5	1.1

表2 出蕾株率50%時の生育

試験区	到達日	最終摘除からの 所要日数	草高 (cm)	芽数	最大葉(cm)		
					小葉長		葉柄長
					縦	横	
4/20	5月10日	19日	20.5	1.2	9.5	10.0	12.0
5/10	5月20日	9日	23.8	2.2	12.3	9.9	11.3
5/30	6月16日	16日	28.3	2.7	10.5	8.5	15.0

表3 等級別収量

試験区	秀品 <sup>1)</sup>			優品 <sup>2)</sup>		外品 <sup>3)</sup> 個数/株	可販果 <sup>4)</sup> 重量/株 (g)	可販果数 割合 <sup>5)</sup> (%)	秀品割合 <sup>6)</sup>	
	個数/株	重量/株 (g)	1果重 (g)	個数/株	重量/株 (g)				個数	重量
4/20	23.9	256.9	10.8	14.8	163.1	21.7	420.0	64.1	61.7	61.2
5/10	25.3	273.1	10.8	12.6	133.6	24.6	406.7	60.7	66.8	67.2
5/30	18.9	200.7	10.6	12.3	128.3	20.2	329.0	60.7	60.5	61.0

1)業務用出荷基準で区分(外観が良好で形状が円錐形の7g以上の果実)

2)業務用出荷基準で区分(外観がやや劣る7g以上の果実)

3)7g未満の小果、奇形果、病害果等

4)秀品と優品の合計

5)収穫果のうち可販果の占める割合

6)可販果のうち秀品の占める割合

表4 株当たり階級別秀品収量 (g/株)

試験区	階級								
	16玉		20玉		24玉		30玉		36玉
	25g≦	18g≦	13g≦	9g≦	7g≦	24玉 以上	30玉 以上	36玉 以上	
4/20	4	18	62	104	69	84	188	257	
5/10	4	17	47	142	63	69	210	273	
5/30	3	6	49	90	53	58	147	201	

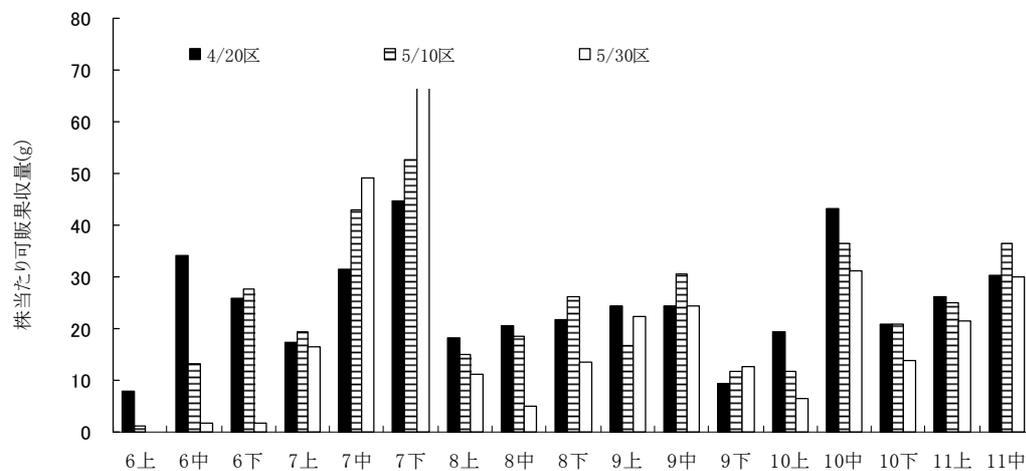


図1 時期別可販果収量